

父、勘右衛門の壮挙

福島県 佐藤 勇

私の出生地は、福島県大槻町（現郡山市）で、祖父は昔、種雄馬を飼っていて「勘吉駒」と呼んでいたが、父もその馬に乗っていたというぐらいの馬好きだった。しかし、次男なので馬は飼えず、少しの田畑を借りて小作し、また出稼ぎもしており、体力には自信があった。

母も健康で、街に野菜行商をして金をためて、母の実家のそばに大きな家を建てたが、子だくさんで生活は苦しく、昭和初期の不景気には悩んでいた。そのころ、長女チヨと結婚した立花開さんが、満蒙開拓に出発したときに、父勘右衛門は、「おれもあと十歳若けりゃ行きたいが」と残念がった。

しかし、三年後に実に十三歳若返って家族全員を連れて渡満したのは、当時の大國策「二十一年間に百万戸

の移民」に、自分の子供十人の将来を託す大英断の壮挙であり、剛腹な夫婦を中心にして、昭和十七年三月に福島から出発した。支那事変に出征した兄が、復員した直後のことであった。

一行は、佐藤勘右衛門四十八歳、妻ヨシエ四十一歳、長男栄司二十六歳、栄司妻トミ十八歳、次男正十九歳、次女マツエ十七歳、三男勇十五歳、三女チエ十一歳、四女ミヨ八歳、五女ミエ子七歳、六女勝子四歳、七女トシ子二歳の総勢十二人での外国への旅であった。それも戦時下のことであり、途中で船が敵の魚雷で沈没するかもしれないと恐れた。大陸の列車を乗り継ぎ、乗り降りのときの混雑の中では、見知らぬ外国人の中で、子供たちが迷子にならぬかと大騒ぎをし、平常は健康な母も乗り物には弱く、車酔いで弱り、父一人が心労の連続で、開拓団に着いたときの父勘右衛門は、惚け状態^{ぼけ}であった。だが、私ら子供たちは、道中が珍しくて楽しくて、元氣一杯だった。入団してからの生活は、食事がまずく、環境の変わった生活に慣れるのに日時を要した。

そこは、三省省富錦県第九次筆架山福島開拓団とい
い、西に筆架山というあまり高くはないが、会津磐梯
山に似た裾の長い双子山があり、その麓に警察遊撃隊
や満人の村があった。団の西に哈達密河、東に安邦河
が流れており、南には岩の多い山が連なり、その向こ
うに遠く鶏冠の如き巨大な岩山が高くそびえ、北は遙
かに松花江が光って望まれる高原地で風景もよく、第
二の故郷となるには申し分がないと皆が気に入った。

私たち家族よりも先に、知人や同郷人など多くの先
輩、そして叔母ヨシノ一家も入団しており、特に、義
兄立花開は、先遣隊で今年から個人経営に入り生活も
安定して、現地人の友人も多く持ち、だれにも負けぬ
と張り切っており、私も同行して馬車で山に入って伐
採したりして楽しく過ごしていた。私たちは親族や親
友が多くおり、異国に來た寂しさなどは感じずに他の
団員たちに羨ましがられた。

だが、どうしたわけか知らないが、立花夫婦は同じ
郡山出身の親友など四家族二十人ほどと、突然に団か
ら追放された。

訳の分からぬ大変な理由は後日聞かされたが、開拓
団とは大変な社会で、特にこの団は特異な体質を持っ
ていたらしい。姉夫婦が詳しい説明もせずに泣きなが
ら団を去ったのは、五月の半ばごろだった。

父勤右衛門は第四地区長として古い満人の村を買収
してそこに入った。家は、粗末だが丈夫であった。父
と兄二人が団員となり、三戸分でなんと土地は六十町
歩の大地主に一躍なった。立花兄の友人の現地人たち
が親切に指導してくれて、現地慣行の農法がはじま
った。

開拓団には、意外に農業に不慣れな若者が多く、意
欲も低調で経営も進まぬ中で、生活にも困窮して病氣
になったり、他人をねたんだりする者もいた。特に、
義勇隊からきた五人組は気が荒く、元警察官という人
は意地が悪く、団本部は経営不振で地区などの面倒を
よく見てくれぬので、新しい地区という社会作りは難
事業で、トラブルが相次ぎ、父は心労が絶えず、母も
弱り痛々しかった。そうした渡満初年度の苦悩は大変
であった。

団としては、建設計画が不調で資金繰りが悪化した。団長は厳しく、副団長は暴慢と評されており、第二、第三、第四、第五地区共に生計成らず、本部を避難する声が上がった。その中で、団員百余戸のうち、副団長の出身地である田村郡出身者が過半数を占めるといふアンバランスが、人心不調和を醸していることをだれもが認めていた。また、この団では、中国人を各村から徴集して、多数を道路工事に使役していたが、賃金を払わず給食も悪かったことを自慢話として聞かされた。各地区でも現地人とのトラブルが多く、この団の評判が満鮮人の間では良くないのは事実らしかった。日本人が現地人の畑を荒らしても彼らは抵抗せぬが、彼らが団員の畑を荒らしたら激しく責めることは数々あった。

私たちと同行した加藤家は、第二地区に入ったが、その主人が突然に事故死し、同地区の平尾さんも肺炎で亡くなり、第三地区にいた叔母ヨシノの長女が病死して、その一家はついに内地に帰ったのが悲しかった。第五地区では藤田家の主人と長男が相次いで病死し、

私の親戚の矢部兄も子供を亡くし、第三地区の安藤青年が山小屋で焼死、第二地区の佐藤家では七十五歳の老母が病で亡くなった。同郷の安積、郡山出身者に災禍が集中しているようで気持ちが暗くなった。

姉夫婦たちが去った後の団には、意地悪な運命が絡みついている感じだった。それに、日本全体が戦況が明るくないのに、「満州は安全で豊かだと憧れてきたのに期待外れだ」と言っている、だれかれとなく当たり散らすという、いわゆる「屯墾病」にかかっているようだった。

わが家では、父母は豪気で自信を持ちながら、長兄は戦地帰りにしては元気がなく、次兄は体格の割にはやる気がいま一つであった。だから私が、年少ながら親の期待を背負って張り切り、肥沃な土地と広さが気に入って、気の強い蒙古馬を使い馴らすのも大人に負けず、何をやっても面白く料理でも何でも劣らずに活動して、姉マツエと真っ先に田畑に出て働いた。五人の妹たちも、皆すくすくと成長して花咲く乙女の如くになり、両親も喜び、わが家の幸福は大地の恵みの中

に確実に盛り上がっている自信に満ちていた。

一年が過ぎて、田畑からあらゆる作物の収穫を手にし、納屋の中に満ち満ちたときには家族の気持ちは高揚した。しかし、他家の人々の生活と心証はどうかと思いやるところまでは余裕がなかった。

団全体の発展は別として、この地を取り巻く環境の整備は進んでいた。山奥から切り出した丸太を、団では製材をしていたし、その山にある富安炭田の石炭を運ぶために、佳木斯市ジャムスから筆架山を通る鉄道工事が急がれていた。さらに哈達密河をせき止めるダムと周辺松井組によって筆架山麓まで進み、鉄道とダムと周辺の山野には、労働者が蟻の群がる如くで、その活況につられて、団の人々の気持ちもなにか明るい方向に誘われており、浮き浮きした気運があった。

しかし、戦時下の情勢は厳しく、耕地面積に応じた農産物供出の督促は年毎に加わり、当局からの指導と催促も段々と厳しくなり、各戸の能力と事情の違いもあって負担が重荷になってきた。供出をしない戸には見返りの必要品の配給もしないなどと、冷酷な話もあ

り、心を寒からしめるものがあった。

他人はともかくも、わが家は三戸分の割当てに対して昭和十九年秋、大豆ほか百八十袋二十トン近い供出をした。大変な苦労の代償として受け取った金は割安でも、綿布や油、砂糖その他の生活必需物資の配給で、戦争中の生活としては困らないほどだった。地区には、立花兄の妹家族といこの矢部さん夫婦もいたが、その生活や身上を詳しく知ることもなく、互いに慌ただしい生活の毎日であり、だれでも楽しいことよりも悪い思い出の方が多い気がして、具体的な記録は重苦しくて書く気がしない。

姉夫婦は、泣きながら団を去るとき、死んでも日本には帰らぬと言ひ、それに対して父は、なるべく遠くには行くなと言って見送った。その後立花兄は、筆架山と佳木斯市の間にある緑ヶ丘開拓団に入ったと報告にきて、父も安心した。

緑ヶ丘は、十戸ほどの小さな地区で、そこは筆架山から出た失敗者の地区で、貧乏生活で無力で惨めで、やる気のない人々の集まりだという。その中で、立花

兄だけは小さな体で必死になって働き、姉も小柄だが病氣もせず三人の子供を育てながら、弟の克と六人家族で牛、豚、鶏を飼い、十九年の秋には米も十分に収穫した。そのうえに立花兄は、独りで山を歩き、射撃が上手で、獐（しか科の獣）を二十頭もとり、虎も撃ちたいと言っていた。そして緑ヶ丘では熱心な農業経営者が少なく、供出者も立花兄一人なので、「おれは副団長をやつて、一人で百町歩経営を目指す」と語り、自信に満ち満ちていた。

事実、緑ヶ丘では畜産開拓団とはいつても、団員十戸ほどが、常に人員が入れ替わり増減して定まらず、農産物供出もさっぱりなので、当局は呆果れていて、その結果、ある日突然にキリスト教牧師がきて、この地区が気に入り、ここに入植すると宣言し認可を得て、昭和二十年に室野玄一牧師のキリスト教団が入植し、地区を分割した。

春近いころにドカ雪が降り、鳥獣も食料に困つたのだらうか、獐が第四地区に迷い込んできて深雪に足をとられて走れずに歩いていて、それを見て地区中総出

で大騒ぎをして追い回したが、門を閉めて土塀の崩れたところの陰に父勤右衛門が潜んでいて、そこから逃げようとした獐を、スコップで打ち殺して大いばりをしたこともあった。

こんな辺境に世界の情報が届くのは遅いが、断続して入る戦況は思わしくなく、我々の心になんとなく暗い影を落としながら、筆架山に幾度かの春が巡りきて、山の姿も温かく、ひばりが空高く声を限りに鳴き続け、人々は田畑での作業に精をだしていた。まだ平和な風景であった。

母は、本来の商売気を出して、多量にあった米で濁り酒を醸造したり、餅をついたりして売っていたので、それを求めて寄って来る人が多く、来ればわが家の大勢の家族が迎えるし、そして若い女とかわい盛りの童女たちがいるというので、わが家は常に和気あいあいとしていた。工事場の男だけの殺伐とした気分から逃れて、蜜蜂が花に寄ることくに、家の内外はお祭りの気分に満ちあふれていたが、他家ではどんな目でもわが家を見ていたことであつたらうか。

わが家は、まさしく天国の気分が盛り上がり、戦争を忘れて別天地の感があり、父と母の心は壮大な可能性を描いて限りなく燃え上がっていたことであろう。父母は最大の期待を私に託し、私もまた両親のそれに応えようと張り切って、名前のとおりに勇み立っていた。

明と暗、光と影。副団長の無茶なやり方に途方に暮れていた老団長が、高血圧で入院していたが、副団長が召集で軍隊に行ったので、それとばかりに、団内の乱脈な資金使途の究明に取り掛かったが、経理担当の責任者である団員も役立たずの始末であつたらしい。時局は大きく暗転し、団の医師も応召し、五月十日には団に十余人の召集令状がきた。長兄の栄司にもきて、わが家の衝撃は大きく、父の命令で、私は翌朝白馬に乗って緑ヶ丘の立花兄のところへ報告に行った。義兄は妻家岡で団のトラックを待ち受けて同乗し、見送りをして帰宅したが、午後三時には今度は義兄に召集令状がきた。「チヨ姉は、こんな小地区に残されてどうなるのだろうか」と思索しつつ、まだ日は高いの

で、私はまた十里の道を馬を走らせて父に急報した。父はさすがに沈痛な顔で、翌朝緑ヶ丘に義兄を見送った。

春は盛りというのに、行く人残る人の心は、吹きつける風に追われるごとくに慌ただしいものがあつた。団長も気持ちを立て直して退院してきたが、団ではなおも召集が続き、チラホラと歯が抜けたようになった。六月には次兄正が、以前に負傷して足が悪いのに召集されてしまった。わが家ではそれでも、なお気を張って黙々と農事に励んでいた。緑ヶ丘の姉は大変だろうと手助けに行つたマツエ姉が、チヨ姉の長女悦子を連れてきたりしていた。

何となく不安な日々の中にも平和ではあつたが、ついにこの私にも召集令状がきた。満十七歳の私にも召集とはと、戦争の先行きに不安が襲ってきた。私と藤田秋夫氏と西山綱雄氏の三人で、八月十日佳木斯に向かつて出発し、翌日入隊。軍服を着たときは、もう街には私たちのようなにわか集めの兵士だけで、ソ連軍の急進におびえて騒然とした悲鳴に似た音と響きの中

に火の手も上がり、不安な状態になっていた。

残ってきた家族のことを思えば気もそぞろで、惑い走る難民の中に知った人はいないかと思えるが、憔悴した顔だけでよく判別もできず、あまりにも惨めな状況だった。この春に国民学校を卒業した妹チエが、従軍看護婦になるということでこの佳木斯にきているが、どうしているだろうかと心配だった。

団では、私が召集された後すぐに刑務所に入っていた人が戻されて帰ってきたという話だった。すでに奥地や富錦方面からの人の動きに、現地人たちの動きも急を告げて避難命令が出て大騒ぎとなったらしい。わが家は十一人もいるので今は覚悟をして、騒ぎ立てずに静かにしていたそうだ。王さんなど数人が手伝いにくてくれたので、家財の荷造りも全部終わり、米俵や食料を馬車二台に満載して出発したのが十二日、雨と悪路で難行し、筆架山麓の精神屯で一泊したが、満人の朋友が来て「行くな！ 私らが守る」と好意と涙の引き止めにも、父たちは感謝の涙で別れたという。

翌朝も悪路の難渋で荷物を次々に捨て、ついには身

一つで急いだが、佳木斯への道は遠く、兄嫁トミは赤子を背負い、マツエも一歳の子を背負い、預かっていた姉の長女悦子の手を引いたり抱えたり必死であったそうだ。父母は妹たち四人を懸命に守り、佳木斯に着いたが、街はもう火の海と爆音の中にあつたという。

途中まで出迎えた軍隊らしい人たちに励まされて最後の避難列車に、すし詰めでようやく乗車できたそうだ。途中で鉄橋爆破の音を後方に聞いて、あとはもう、敵襲や脱線事故や空襲避難やらで生きた心地がしなかったという。これらの状況は多くの人々の証言がたくさんあるところではあるが。

何日目に綏化^{スヰ}の街に着き、飛行場の格納庫に入つて終戦を知つたという。その飛行場での避難生活中に、緑ヶ丘のチヨ姉に会い、悦子を姉に渡したときのマツエ姉はどんなに安心したことであつたろう。それにしても、チヨ姉のその後の苦労はもう大変で、姉のことを思えば胸が張り裂けそうになる。

一方私は、終戦と共にソ連軍の捕虜となってシベリア中央部の収容所に抑留され、強制労働に服していた。

私は少年ながら、精強な軍人の中で、親から受けた頑健な体で、だれにも負けず、敏活に、要領もよく立ち回り、傷病もせずに、思想も変わらず頑張り通し、三年間を無事に生き抜いて、昭和二十三年四月に帰国し福島に着いた。

母とマツエ姉母子、妹ミヨが、二十一年六月に帰国、次兄正もソ連から二十二年に帰国していたが、父勘右衛門、妹ミエコ、勝子、トシ子、そして兄の子司の五人が奉天で死亡し、兄嫁トミ子は生死不明、長兄栄司は二十年十月初めにソ連で抑留中に死亡し、姉チヨも奉天で死んだ。

何という悲惨さか。これが、国策に賭けた一家百年の大計の結末なのか。

そのなかで、妹チエは強気で、敗戦の祖国に帰って米国の自由にはならぬと明言して、中国に残留したと聞いていた。しかし、事実は干という男に保護されて心定まったということであったようだ。

母は、十年前のごとく野菜や食料品の行商をしてい
たし、兄も姉妹も、衣食の業に励んでいたの、私も

健康であるので、とりあえず自転車屋に弟子入りした。母が、早くも小さな家を建てたので、私も同居して自転車店を開業した。

母は強い女であった。容姿も大柄で目立っており、遠見のよい美人とでもいうのか、そして無口で大胆で商売の勘がよく、何をやっても利益を得るほどで、三文店という田舎道の家に雑貨を置き、煙草も売り、戦後の統制時代に酒、米その他何でも闇売りをした。警察も男も恐れずに、引揚者の意地で変幻自在な商売のやり方は、巾と底が知れぬと評されていた。無学（幼時から農業手伝いのために通学できなかった）だが自己流の暗号みたいなメモをもち、金勘定も暗算で的確に計算し、記憶力がよく、小金を常に持って動かししていた。私が見ても計り知れぬ商才を持っており、口数が少なく何でもやってのけ、男勝りの中年女の魅力に男が惚れても相手にせず、正に女傑と言うにふさわしい女であった。

その反面、人からの悪評を買うこともあった。特に、長男栄司の嫁トミの生死不明は、トミの実家から激し

く非難されたが、一言も弁解せず、自分の心の中にい
か程の悲と苦があろうとも口に出さなかつた。ただ、
静かに人知れずに涙を流していたようだった。一度、
終戦記念日に全国戦没者追悼式の式典に招かれて参列
したことがあつた。八十歳過ぎまで病氣知らずで働
き続けたが、さすがに晩年は疲れがでて入退院を繰り返
し八十四歳で亡くなつた。生涯に思い残すことはなかつ
たろうと思う。偉い母であつた。

私も、病気をすることもなく、人に負けるのは嫌
いで、堅実に無駄なく働き、自転車からオートバイまで
商うようになり、結婚して二男を育て、生活を確実に
築いてきたが、安達太良山で開拓をする立花兄の影響
で心機一転して植木屋を始めるととなり、自転車店
をやめて庭師になつた。長男も体格が良く私を助けて
親子庭師になつた。手広くはないが、新興都市郡山市
での堅実な営業は、満州・シベリアでの鍛練のたまも
なのであろう。次男は温順な性格で、家系に因縁を感じ
てか、世のために働くと言っている。

次兄正は、シベリアから帰ってなんとなく心身が弱

く、音楽を好んで悠々自適といつた余生を送っている。
姉マツエは、健康多産で八人を産み、さらに他人の子
を五人も育て上げた。

中国に残留した妹チエは、二十六年秋に手紙をよこ
して「私も帰ればよかつた」などと泣き言をいって
いたが、「今、幸せか？」と問えば、「夫は良い人です」
と答えていた。二女一男を産み、夫は出世したと順調
らしく、相変わず強氣であつた。一度は帰りたいと
言いながらも文化大革命の最中で、毛思想の体系を堅
持する姿勢を崩さなかつた。昭和五十年ついに一時帰
国を果たした。当時は母も健在で、発展した故国日本
を見て驚きかつ口惜しがり、真っ黒になつて一夏を賃
稼ぎなどをして一年で帰国した。その後にもたやつて
きて、今度は出稼ぎで金をためるのだと言いながら日
本での再出発を宣言した。その後、子供たちも次々に
母を追つてきて日本に定住、最後には夫もきたが、結
局は国際結婚の破綻という結末になつた。

もう一人の妹ミヨ子は、温順で近所で夫と共に理容
師をして評判がいいようだ。

満州から苦勞して生きて帰った者は、その苦勞をはね飛ばすように頑張った。

皆が、一応それぞれ落ち着いてくると、父のことが思い起こされる。あれほど国策にぴったりの雄志を抱いて、その精神を鮮やかに実現し、子供たちの未来も万全という自信を持っていたのに、そうならなかったのは、国と軍部の誤算に責任があったと思っ

あまりにも無残な結果に、父は、「こんなことではあきらめ切れない。何とかしてもう一度やり直したい」と、避難の最中にも言っていたと聞いたが、私も同感であった。

あの広い豊かな天地にわたしたちの可能性は無限にあったのだ。現地人と対等に誠実に協和して、日本にはないすばらしい純朴な文化と生活ができたはずだったのに、それができなかつたのが残念だった。

父は、家族を生かすために、男の責任で命を使い果たしてしまつたのだ。母の生涯も実にそうであった。今私が、植木屋庭師をやりながら考えるのは、これは自然を相手の満州生活の延長だということだ。そして、

あのようなどい目に遭つても、満州に行ったことを後悔はしていない。

大陸の地と、現地人に会つたことはよい体験で、真実の日中友好であつたのだ。

父も母も、同じ思いであろう。父よ、かわいい妹たちよ、どうぞ大陸の地で生まれ変わつてほしい。

私の永住帰国までの血涙の労苦

福島県 三瓶 マツエ

一 希望に燃えて満州へ

私は、昭和十四年四月、二十三歳のときに、福島の本宮町出身の渡辺敏美と結婚し、郡山市に新居を構え平凡な生活を始めました。

夫は、当時日本化学株式会社勤務し、朝早く出掛け、夕方遅くまでまじめに働いていましたが、次々と子供が生まれ、昭和十九年には三人の子供がいて、生活は大変でした。戦争は段々と激しくなり、物は不足